

あやまる教育を

教育の中における障害児差別について

福井達雨

きらいだった母

私の母は、小学校もろくに行っていない女性であったが、キリスト教の信仰をもち、キリスト者になった。そして、三十八歳で子宮癌のため天上に召された。

私は、その時、高校二年生であった。

アメリカとの戦争が始まり、その中で、母は、キリスト教の信仰決断から、戦争を反対した。そして、何度も警察の留置場に入れられたのである。私の幼少期で、深く心に残っているのは、母の着替えを、警察に何度も持って行ったことである。

この時期、母がきらいでたまらなかつた。警察に通うのもつらかつたが、もっと寂しかったのは、友だちがいなかつたことであ

る。

友だちと遊ぼうとする。

「お前のお母さんは、非国民で悪い人間や。その子どもは、悪いにきまつてあるから、遊んでやらん」

こう言つて、仲間はずれにされる。

隣の家に遊びに行くと、かかわりあいになるのがおそろしいので、おい出されてしまう。

学校で何か事件がおきる。犯人が出てこない、先生や周囲の子どもは、ほとんど私を犯人だと決めてしまう。

「お前の母親は、悪い母親だ。その子どもは、悪いにきまつている」

この論理が、すべてに通つてしまうのである。

「絶対やっつけない」

とがんばると、

「お前は、強情な子どもや」

と、叱られ、さらわれ、いっぱい水を入れたバケツをもって立たされたり、炎天下の運動場を何周も走らされたり、たたかれたりした。(どうして先生やみんなは、私の心がわかってくれないのだらう) 私は、先生や皆に、強い不信感を、この時期にもっていた。

こんな状態からぬけ出したくて、幼年学校や、予科練に入り軍人になろうと思った。

「人を殺すことを教える学校は、悪い学校だから、行ってはいけない」

と、母は、大反対をして、行かせてくれなかった。この母に、(非国民で、悪い母親だ)と私は思った。

私の幼少期は、一人でセミをつかんんだり、小川で小ブナをすくったり、コマをまわして遊んでいた。(こんな悪い母をもった子どもは本当に不幸や。こんな母に生まれなければよかった) 私は、何度もそう思い、母が憎くてしかたがなかったのである。

子どもにとつて友だちがいなほどきびしいことはない。誰も遊んでくれず、さらわれ、白い目で見られ、私はこの時、日本の

子どもとして存在していたが、日本の子ども仲間から捨てられ、所属が与えられなかった。

子ども心に、(本当に、ぼくは、不幸や。死んだほうがましや)と、思っていた。

この母の偉大さに、気付いたのは、同志社大学に入ってからであった。

母は、死ぬ四日ほど前に、私たち子どもを呼び、

「目に見えるものより、目に見えないものを大切にしろさい」「偉い人よりも、立派な人になりなさい」この言葉を子ども心に残して、この世を去って行った。

「目に見えるもの」と「偉い人」は、同じ意味で、物や金。有名な人、地位のある人を指し、「目に見えないもの」と「立派な人」も同じ意味で、偉い人の中にも、貧しい人の中にも立派な人はいる。

目に見えない信仰、理想、情熱、生命等をつぐ心の豊かな人間に育ってほしい。

これが、母の子どもに対する願いであったのだろう。

私は、きらいだった母の性格を、幼少年期に受けついでしまった。(きらいだきらいだ)と思いつつも、いつのまにか、母の生き方が、私の心に生きている。

幼少年期の教育は、恐ろしくて、大変で、素晴らしいものだ、シミジミ感じるのである。

所属を奪われた子どもたち

私が大学の二年生になった時、初めて重い知恵おくれの子どもたちに出会った。その出会いから、二十年余り、この子どもたちと共に歩んできた。

この中で、強く感じているのは、重い知恵おくれの子どもたちが、私の幼少年期と、同じ生活をしているということである。

「お前たちは、ぼくたちの仲間ではない。だから遊んでやらな
い。」

こうして、私たちの仲間に入って遊ばず、友だちがいない。

この現実にあつかった時、あの幼少年期の思い出が、心によみがえってきた。

(二度と、この子どもたちに、あの暗い、悲しい思い出をもたせてはいけない) こう感じると、激しい心の燃焼がおきたのである。

重い知恵おくれの子どもたちと生活しながら、重い知恵おくれの子どもたちにとって、何が本質的に不幸なんだろうかを考え続けてきた。

大小便たれ流し、手づかみ食べ、テンカンをもち、何もできないことが、不幸なんだろうか。私には、どうしてもそうは思えない。とすれば、この子どもたちは、不幸でないのだろうか。いや、決してそうではない。

本質的な不幸を、この子どもたちはもっている。それは、「実存」をおかされているという不幸である。

人間は、誰でも実存をもっている。実存の中で、真実に人間として生きていくために、二つの要素が必要となる。

一つは、人間として「存在」することであり、もう一つは、人間として認められ、仲間の中に、「所属」が与えられることである。

実存とは、存在と所属が相まって、それが生まれる。

たとえば、私は、約四十年前に、人間として生まれ存在した。だから人間である。もし、サルとして存在していたら、今、サルと言われていたはずである。

しかし、人間として存在するだけでは、人間は生きられない。人間として存在しても、生まれた時に、オオカミやサルの世界につれこまれば、形は人間でも、心は、オオカミやサルとしてしか発達しないのが人間である。

人間は、人間の仲間があつて初めて発達するのである。

また、基本的な人権や、生活権を奪われて、人間は、生活できずであろうか。誰も相手にせず、友だちもいない。一人ぼっちで人間は生きられない。私たちは、人間仲間の中で、人間として認められ、所属を与えられて生活してきたのである。

しかし、重い知恵おくれの子どもたちは、人間として生まれ、存在しているにもかかわらず、人間として仲間からはずされ、所属が奪われているのである。

「保育園、幼稚園、小学校、中学校に来てもらっては邪魔になる。世話がかかるから困る。君たちは、施設や養護学校に行くべきだ」

こうして、私たちは、重い知恵おくれの子や障害児を仲間に入れない。

一人か二人、軽い障害をもった子どもが保育園や幼稚園に入っていると、

「私の園は、障害児を入れております」

と、当然のことを、自慢そうに語るようになってしまふ。

よく考えると、所属を奪い、差別し、この子どもたちの生命をおかし、不幸にしたのは、障害をもたない私たちであったのだ。

私たちは、この子どもたちを不幸にしておいて、「可哀想に」「不幸な子どもたち」「保育園や幼稚園に入れてやらなければいけ

ないんだ」と言ってきた。

こんな残酷で、高慢なことがあるだろうか。

私は、この二十年余り、重い知恵おくれの子どもたちと生活し、何もしてやることはなかった。愛も、奉仕も必要ではなかった。

ただ一つ、一途に、ひたすらにやってきたことがある。それは、「あやまる」ことであつた。

「君たちを不幸にしたのは、障害をもたない私たちであつた。しかし私は、私たちは、無意識に、何も知らないで、差別し、生命をおかしてきた。そのことを自覚し、目覚め、知った私が、障害をもたない仲間の中の一人として、その連帯の中で、あやまりたい。君たちを不幸にしたのは、私たちだつた。許してほしい」
私は、土下座をしながら、この子どもたちにあやまり続けてきた。

さて、あやまる私が、私の一番大切なものを横において、「ゴメンナサイ」「スミマセン」「ユルシテクダサイ」と言つたって、生命をおかされた人たちが、どうして許して下さるであろうか。差別をうけた人が許して下さるまで差別はある。

私は、自分の一番大切なもの、「生命」をこの子どもたちにぶつけ、あやまり続けてきた。

私の障害児教育の原点は、「怒り」「恥かしさ」「あやまる」この三つであった。

差別する私や私たちに、怒りを感じ、不幸にしておいて救済しようとする高慢さ、残酷さに恥かしさを感じ、あやまらなければと思ったのである。

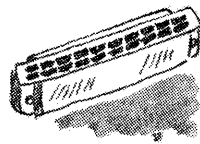
今、幼児教育の中で、この子どもたちが所屬を奪われ、実存をおかされている。「こんな子どもが園に入ってきたら大変だ」この言葉、心の中に、障害児差別の根がある。

このことをもう一度、教育者はふり返り、反省しなければいけないのではないだろうか。

私の幼少年期のあの暗い思い出を、重い知恵おくれの子どもたちや障害児たちに二度と味わわせない教育を進めていきたい。

いつの日か、この子どもたちにあやまりつつ、差別のない教育の場が生まれてくることを信じ続けている毎日である。

(止揚学園)



幼児の教育 第七十四巻 第三号

三月号 © 定価二〇〇円

昭和五十年二月二十五日印刷

昭和五十年三月 一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレーベル館にお願いたします